

2022年11月20日 午前礼拝
「ナザレ人イエス」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】

マタイ 3:1~15

1. そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。
 2. 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」
 3. この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』」
 4. このヨハネは、らくだの毛の着物を着、腰には皮の帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であった。
 5. さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々がヨハネのところへ出て行き、
 6. 自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。
-
13. さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた。
 14. しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」
 15. ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこで、ヨハネは承知した。

【説教要約】

①悔い改めなさい

マタイ 3:1, そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。

マタイ 3:2, 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

マタイ 3:3, この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』」と言われたその人である。

イエス様の働きはおよそ 30 歳の時に始まりますが、その最初の出来事がこのバプテスマなのです。

バプテスマのヨハネが遣わされたのは、聖書の預言によってでした。
引用されているのはイザヤ 40 章 3-4 節です。

主が来られる。神様が来られる。だからその前に、神様の通られる道を整備する預言者が遣わされます。それがバプテスマのヨハネです。主が通られる道とは、人の心のことです。

マタイ 3 : 2, 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

「天の御国が近づいた」とはどういう意味だと思いますか。

王様のいる国を想像すると分かりやすいですが、国を支配しているのは王様と法律です。その王国に入ったら、その国の王と法律に従わなければなりません。なら、天の御国の王と法律は何に当てはまるでしょう。神様が王で、みことばが法律です。神様が支配しておられる国が、天の御国です。

その神様の支配が近くまで来ている。だから悔い改めなさいとバプテスマのヨハネは宣べ伝えたのです。悔い改めについて、多くの場合、「反省」と混同しがちです。もちろん、自分の罪や欠けを悔いるという面はありますが、一番は「向きを変える」「立ち返る」という意味が強いのです。

イザヤ 53 : 6a, 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。

聖書は、人を羊によく例えます。羊は視力が悪く、いつも羊飼いに道案内をされなければ迷ってしまいます。羊飼いがいなければ、羊は自分勝手な方向に行ってしまうのです。羊のように、神様から離れて自分勝手な道を行ってしまうこと、これが罪と呼ばれるものです。「私たちがみな」とあるように、すべての人がこのようであると聖書は言います。

罪の力には人間のどんな努力をもってしても勝てません。ですから、自分の数々の罪を後悔したところで、堅い決心をしたところで、「自分勝手な道に歩む」傾向は変わりませんし、勝利することはできないのです。

そこで神様が求めておられることは、私たちがありのままに神に立ち返る、神の方向に向き直ることなのです。「自分勝手な道に歩む」のは人間の生まれながらの習性ですが、その先にあるのは「死」です。私たちの努力で死の定めを変えることはできず、「いのち」はありません。

「いのち」を得るためのただ一つの道は神に立ち返ることです。たとえ「自分勝手な道に歩む」傾向が自分のうちにあったとしても、そのまま、ありのまま、何度でも神の方向に向きを変えること、それこそが「悔い改める」ことなのです。

よくあるのは、赦された罪、終わった罪を引きずってしまうことです。不定期に思い出しては同じ罪について後悔し、落胆してしまうのです。ただ、それは「反省」なのです。自分の罪を見つめているとそこから離れられません。

立ち返る、向きを変える時には、新しい目的地に目を向けます。呼びかけてくださっているイエス様の方を見ます。今いる場所から離れることも必要なのですが、それ以上にイエス様の支配する王国へ向かうことの方が重要です。イエス様を見て、イエス様に委ねる時、自ずと罪から解放されていきます。

決して、自分の内側、「自分勝手な道に歩む」傾向を直してから、神に顔を向けようとは思わないでください。神に向きを変えることによって、神が私たちのうちにすべてをなしてくださるからです。

②さばき主であるイエス様

マタイ 3 : 7, しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。

マタイ 3 : 8, それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。

マタイ 3 : 9, 『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言うておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。

バプテスマのヨハネがバプテスマを施しているところに、パリサイ人とサドカイ人がやってきました。

パリサイ人は律法をきちんと守れば救われると思っており、サドカイ人はアブラハムの血筋だから救われると考えていました。

たくさんの方が悔い改めのためにバプテスマを受けているのを、高みの見物をしていたのです。「自分は救われて当然」と思っていたからです。

マタイ 3 : 10, 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。

マタイ 3 : 11, 私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。

マタイ 3 : 12, 手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

ここで言われている良い実とは、人が考える良い行為とは少し違います。

ヨハネ 15 : 5, わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。

それは神様から見て良い実を結ぶことなのです。それは、イエス様に繋がっていないならば決して結ぶことのできないものです。パリサイ人達は自分で「私は救われる価値のある人間だ」と考えていましたが、そのプライドは神様の前では、切り倒されるのを待つ木のようでした。

では、どうしたらイエス様に繋がって実を結ぶことが出来るのか。それは「聖霊と火とのバプテスマ」によってです。これは、イエス様を信じた人に与えられる聖霊のことです。

使徒 2 : 1, 五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。

使徒 2 : 2, すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。

使徒 2 : 3, また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。

使徒 2 : 4, すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました。

今でこそ、このように目に見えませんが、聖書が成就したことが分かるように、3度見える形で聖霊が初代クリスチャンの上に臨みました。

水のバプテスマは人の目に見えますが、その人の心がどうなっているか分かりません。また、人の心を変える力もありません。水のバプテスマは、すべての人の前で行なう証だからです。

しかしイエス様が行なわれるのは、心の変化です。それは私たちの気持ちとか、熱心さとか、努力によってではなく、ただ聖霊が心の中に住んでくださるからできるのです。

そして、最後の審判の時、このことが決定打となります。イエス様は信じて聖霊を受けているかどうかでさばきをされるからです。それは麦の脱穀に例えられています。麦は脱穀するとみがらに分かれます。それをスコップの様な箕を使って空中に放ります。すると麦は重くみがらは軽いので、風がそれを分けます。

同じように、神様の前には聖霊がおられるかどうかは、麦なのかもみがらなのかというくらい別物です。そして、もみがらを焼き尽くされるように、消えない火に投げ込まれるのです。

③ 罪びとの側に立たれたイエス様

マタイ 3 : 13, さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた。

マタイ 3 : 14, しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」

マタイ 3 : 15, ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこで、ヨハネは承知した。

驚くべきは、バプテスマを受けにイエス様が来られたことです。今まで出て来た人々、すなわち「自分は罪人だ」と告白してバプテスマを受けた人々、あるいは「私は救われる人間だ」と高みの見物をしていたパリサイ人やサドカイ人たちがいました。イエス様は、まさにこの両方をさばくことのできるお方です。

一人一人を見て、赦したり、ヨハネが言うように火に投げ込んだりすることのできる方です。そのイエス様は、お働きの最初、さばきを行うのではなくバプテスマを受けに来られたのです。

それはつまり、「私は罪人です」と低くなった人たちと同じことをしたのです。イエス様は罪を持っておられませんでしたが、罪人をさばくのではなく、罪人と同じ立場になられたのです。

クリスチャンが教会でバプテスマを受けると言う時、それはイエス様と同じようになることを証するためです。

ローマ 6：4, 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。

もはや罪の奴隷だった自分は死んで、キリストと一緒に生きることになった新しい自分であると公に証するのです。

しかし、イエス様はそのお働きの始めに何をなされたでしょう。イエス様の方が、私たちと同じようになってくださったということなのです。私たちは、自分の内側を少しでも真っ直ぐ見ることがあるならば、とても神様の前に立てないような罪深い自分を発見します。多分、誰よりもその事実打ちひしがれるのは自分自身でしょう。

しかしイエス様は、そんな私たちを遠巻きに見たのではないのです。まして、裁き主として上から見下ろしたのではないのです。その、どうしようもない私たちの方にやってきて、「わたしもあなたと同じ立場になった」と、罪人が受けるバプテスマをお受けになられたのです。

ピリピ 2：6, キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ピリピ 2：7a, ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。

私たちはいつも二つの道を問われています。

一つは、自分が神様の前に罪びとであることを認めて、正直に悔い改める道です。それはみんなの前で罪を告白し、バプテスマを受けた人々のように、恥を負う道かもしれません。

あるいは、パリサイ人たちのように「自分は大丈夫」と神様の前に悔い改めない道です。彼らには警告として、消えない火に入れられると宣言されました。

もし私たちが日々、罪を告白し悔い改める道を取るなら、幸いなことにそこにいるのは罪を裁く神様ではありません。同じ身分になってくださったイエス様がそこにはおられるのです。

Iヨハネ 1：9, もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。